



Title	Does Prompt Treatment of Hypertension after Blood Pressure Check-ups Reduce Morbidity of Cerebrovascular Disease?
Author(s)	新庄, 文明
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41123
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について ご参照 ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	新 庄 文 明
博士の専攻分野の名称	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 1 4 2 1 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 10 年 12 月 4 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 名	Does Prompt Treatment of Hypertension after Blood Pressure Check-ups Reduce Morbidity of Cerebrovascular Disease? (健康診査による高血圧の発見と早期治療は脳血管疾患の病状を軽減させるか)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 多 田 羅 浩 三 (副査) 教 授 森 本 兼 曩 教 授 荻 原 俊 男

論 文 内 容 の 要 旨

[目 的]

わが国では、年間2000万人以上の成人が職場あるいは地域において血圧測定を含む健康診査を受けており、健康診査の実施や高血圧の減少にともなって脳血管疾患の死亡率や発生率、老人の平均入院日数の減少が示されている。しかし、このような集団を対象とした研究の結果は、必ずしも健康診査受診と脳血管疾患発症状況との直接の関連を示すものではない。

そこで本研究は、健康診査により発見された高血圧の早期治療の受診と脳卒中発症時の重症度や年齢、病型との関連を明らかにすることを目的として行った。

[方 法]

大阪府下N市(当時人口25万5814人)において、1992年1月16日から2月13日までの期間に市内の医療機関(174診療所、17病院)を外来、通院または往診により受診した、あるいは市内の特別養護老人ホーム(4か所)に入所していた者のうち、満50歳以上で脳血管疾患を有した者の全てを対象とした。発症時の日常生活動作能力、四肢麻痺の程度、リハビリテーションの必要度、および病型の判定は主治医によって行った。病型はICD-9に準拠して、脳出血(コード431)、くも膜下出血(コード430)、脳梗塞(コード434)、およびこれらのいずれにも該当しない「その他」の4区分に分類した。脳血管疾患発症前の高血圧に対する健康管理状況については、対象者自身に対するアンケート調査を行い、健康診査や医師の受診時に高血圧を指摘されていなかったと回答した者を「異常なし」群、高血圧を指摘されて治療を受けていた者を「治療中」群、健康診査や医師を受診していなかった者を「未受診」群、高血圧を指摘されていたが治療を受けていなかった者を「放置」群とする4群に区分した。脳血管疾患を有した者については978名の報告があり、そのうち健康管理状況に関する回答が得られたのは668名(回収率68%)であった。

結果の分析には、大阪大学大型計算機センターのSPSS-Xを利用し、それぞれの判定区分について健康管理状況別の人数割合を比較した。

[成 績]

脳血管疾患発症前の健康管理状況は、「治療中」群が47%で、「未受診」群は25%、「異常なし」群は16%、「放置」群が12%であった。

病型別の人数分布を発症前の健康管理状況ごとにみると、脳出血と診断された者の割合は「異常なし」群および「治療中」群においては「未受診」群あるいは「放置」群の約半分であった。くも膜下出血の者の割合は「放置」群で最高であった。脳梗塞の者の割合は4群ともほぼ同様であった。その他の病型に該当する者の割合は、「異常なし」群と「治療中」群が他の2群よりも大きかった。

脳血管疾患発症時の平均年齢は「異常なし」群（68歳）が最も高く、「治療中」群（67歳）、「未受診」群（66歳）の順に若くなり、「放置」群（64歳）が最も若かった。脳出血と診断された者においては、「異常なし」群と「放置」群の発症時平均年齢には7歳の差があり、くも膜下出血の者では同じく16歳の差があった。

発症時の日常生活動作別の人数分布については、寝たきりの者の割合は「異常なし」「治療中」「未受診」「放置」の順に大きくなり、「異常なし」群では「放置」群の半分であった。一方、自立して移動、外出できる者の割合は、上の順に小さくなっていった。寝たきりあるいは座位が可能な者の割合について性、年齢補正をしたオッズ比は、「放置」群が「異常なし」群に対しては2.83、「治療中」群に対しては2.82で、いずれも統計的に有意な差であった。

麻痺の出現割合は、日常生活動作と同様に「異常なし」「治療中」「未受診」「放置」の順に大きくなり、四肢に麻痺のみられる者の割合は「異常なし」群では44%、「放置」群では71%であった。性、年齢補正をした麻痺の出現に関するオッズ比は、「異常なし」群に対して「放置」群は2.89、「未受診」群は1.78で、いずれも統計的に有意な差であった。

定期的リハビリテーションを受ける必要のある者の割合は、「異常なし」「治療中」「未受診」の各群においては約30%であったが、「放置」群では40%であった。定期的あるいは随時にリハビリテーションを受ける必要がある者の割合について性、年齢補正を行ったオッズ比は、「異常なし」群に対して「放置」群は2.29で、その差は統計的に有意であった。

[総 括]

本研究の特色は、一都市において一定期間内に脳血管疾患により受療した全ての者を対象とした調査であること、および医師による病型、障害の程度やリハビリテーションの必要度に関する判定と、健康管理の状況に関する脳血管疾患の発症者自身からの回答を、それぞれ独立して得ることができたことにある。分析の結果は、健康診査や医師の受診により高血圧を指摘されて早期治療を受けることが脳血管疾患の発症年齢を遅らせ、また発症時の重症度を軽減させた可能性があることを示唆している。

健康診査の実施状況について標準的なレベルにあるN市の住民に対する本研究において、高血圧の指摘を受けて早期治療を受けていたと回答した者が47%であったということから推測すると、全国で実施されている健康診査による高血圧の早期発見が、脳卒中発症者の約半数にあたる患者の重症度を軽減させていることを示唆している。

論文審査の結果の要旨

本研究は、健康診査により高血圧が発見され早期治療などの血圧管理を行うことが脳血管疾患の病型、発症時の年齢や重症度と、どのような関連を有するかを明らかにすることを目的として、大阪府下N市の満50歳以上の市民で脳血管疾患を有し、一定期間に市内の診療所、病院のいずれかを受診した者、および老人福祉施設の入所者の全てを対象として実施したものである。

担当医師からの報告にもとづく病型、発症時年齢、発症時の重症度と、患者自身の回答から得られた発症前の血圧管理状況との関連を分析し、次のような結果を得ている。

(1)脳血管疾患の病型別人数割合をみると、「健診未受診」群や「発見後放置」群では脳出血と診断された者の割合が「正常血圧」群あるいは「早期治療」群の約2倍であった。

(2)脳血管疾患の発症時の平均年齢は、「発見後放置」群において、「早期治療」群より3歳若く、「正常血圧」群よりも4歳若かった。

(3)脳血管疾患の発症時の重症度では、「寝たきり」あるいは「座位が可能」な者、麻痺の出現頻度、リハビリテーションの必要性ともに、「発見後放置」群は「正常血圧」群に対して有意に大きな割合であった。

(4)脳血管疾患の患者のうち、高血圧を指摘されることにより早期治療を受けた者は47%であり、健康診査の実施は、脳血管疾患の患者の約半数において症状の軽減につながっていると推計される。

本研究の特色は、一都市において一定期間内に脳血管疾患により受療した者の全数を対象とする調査を行うことにより、健康診査による高血圧の早期発見が脳血管疾患の発症年齢を高くし、発症時の重症度を軽減させることを明らかにした点にある。この研究成果は、今後のわが国の地域における健康管理事業の推進に資する貴重な知見を明らかにしたものであり、学位に値するものと認める。